

研究・調査報告書

報告書番号	担当
23	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名（原題／訳）	
Cigarette smoking and alcohol consumption in relation to cognitive performance in middle age 喫煙および飲酒と中年期の認知能力との関連	
執筆者	
Sandra Kalmijn, Martin PJ van Boxtel, Monique WM Vershuren, et al.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
American Journal of Epidemiology 156:936-944, 2002.	
キーワード	
年齢、年齢群、飲酒、認知、コホート研究、中年期、精神運動機能、喫煙	
要旨	
<p>高齢者において、喫煙が認知機能を低下させ、中等度のアルコール摂取が認知能力を上昇させることが知られているが、中年期においてはよくわかっていない。そこで、1,927人の無作為に選ばれた45-70歳の中年期の人を対象としてコホート研究を実施した。対象者はオランダに居住していた人々で、1995年から2000年にかけて追跡された。精密な認知機能検査が実施された。その他の危険因子は5年前に調査されたものである。線形重回帰分析の結果、年齢、性、教育、アルコール摂取量、循環器疾患危険因子を考慮にいれても、現在の喫煙は認知機能を低下させた。これは、4年の加齢に相当するものであった。飲酒習慣は、認知機能を上昇させた。特に、女性の毎日1-4杯の飲酒は、認知機能の早さと適応性を高めた。結論として、中年期の男女では、喫煙は精神運動機能と認知機能の適応性と負の関連を、アルコール摂取は正の関連を有すると考えられた。中年期から認知機能低下に対処できることを示した。</p>	